

## 河野多恵子『不意の声』論

——エディプス・コンプレックスからくる吁希子のマゾヒズム——

増田 周子

はじめに

『不意の声』は、昭和四十三年二月に「群像」（第二三卷二号）に発表された作品である。発表当初から、話題を呼び、朝日、毎日、読売の大手三社だけでなく、書評新聞でも文芸時評欄でとりあげられた。同時代評は、必ずしも肯定的な評価ばかりではなかった。上田三四二は、「今月、最大の興味をもって読みすすみ、途中で、ひどい平手打ちをくらった小説がある。河野多恵子『不意の声』（群像）」（注1）と述べ、平野謙は「一口に言って、現在この作家は資質的に無理しているように思えてならぬのである。」（注2）という。しかし、吉田健一の「少なくともこの小説には日本で小説といふものを書くのに或る程度の変化を与える方法の端緒のやうなものが見られる。」（注3）や、同じく吉田健一の「文学で異常なことを取り扱う唯一の方法がここにも示されていて、その点でこれは佳作である。」（注4）などは、『不意の声』の持つ内

容や手法の新鮮さに注目している。

『不意の声』は、次のような話である。主人公吁希子は以前ある異性と恋愛関係にあったが失敗し、長い間独身生活を続けた後、尅一と結婚する。彼女は尅一と結婚したころには何らかの原因で石女となっていた。尅一との仲もうまくゆかず、険悪な状態となり、ついに吁希子は出ていってしまう。夫に對する憎しみが募りきった吁希子は、亡父の「やってみるがいい」という「不意の声」に導かれ、自分の母、まさみち君（昔の愛人がその後、妻との間に得た男の子）、実に他愛のない無縁の男の三人を空想裡に殺害する。筆者は、「河野多恵子『不意の声』論―初出と初版本の異同からみるリアリティー―」（徳島大学国語国文）平成一〇年三月三十一日、第一一号）で、河野多恵子氏が初版本を刊行する際に改稿したことによって齎された文学的意義について比較検討し、初版本の方がリアリティーが鮮明であるという点で初出以上に文学的価値を高めていると論究した。しかし、紙面の都合上内容については触

れられなかった。そこで、本稿では、初版本『不意の声』をテキストとして作品内容からみる問題点を採り上げたいと思う。

『不意の声』を一読すると、いろいろな疑問を感じる。例えば、(1)亡父の幻影がなぜ吁希子に見え、その指示に従うのか。(2)亡父はなぜ若返ってくるのか。(3)吁希子はなぜ殺人を行うのか。(3)殺人の対象に、母・昔の愛人がその後に得た子供・無縁の男の三人を選んだのか。(4)三人目の男を冷蔵庫に入れてしまう場面は何を表現しているのか。(4)巡査が出現するのはなぜか。などである。これらはいずれも相互に係わりがあり、切り離しては考えられないものであるが、少しずつ説明していきたい。

## 一、吁希子の生い立ち

『不意の声』では冒頭に、「吁希子は時折、亡父に対面する。彼女が請う時には必ず、そして時には自分のほうからも訪れてくれる亡父と、不思議な、親しい対面をする。」という亡父の訪れの描写があり、その後の伏線となっている。そして、その次に吁希子と両親とのかかわりが詳細に書かれている。原稿用紙の枚数にして約二十枚である。この二十枚もある描写は、決して見逃すことはできないし、吁希子の幼少時から両親に対する気持ちの移り変わりは、前に揚げた問題点と密接につながっていると思われるので、それらを本文から抽

出し、検討してみたい。

・幼少時：吁希子は、「父には叱られた記憶はなく、叱るのは常に母だった」が、「父のほうが余程怖かった。」「母に叱られる時」には、「惨めさや怖れや気苦労を味わったものだが、」「日常の身近かさや優しさのために、母には親しみを覚えた。」一方、母や兄を叱る時の父に恐れを感じ、「彼女は絶えず父を警戒せずにはいらなかった。」

・十五・六歳：吁希子は、「気持の内部で、父の怖さも、母の怖さも、夫々急に減じた。」母には、「かねての怖さが減じた分だけ、優しい気持を抱くようになった。」父には、「恐ろしさを感じることはもうなかったが、今度は父が煙たくなりはじめ」、「父を拒否し」、「父が鬱陶しくてたまらなくなった。」そして、「父を毛嫌いにすることに、一向に気咎めは覚えなかった。」

・動員された頃：初めて「自分が如何に親たちを頼りにしていたか」と気づき、厳しい動員生活から、「自分を救い出すことは、親たちにさえ出来ない」からという理由で、「親だって最早頼りにはならないのだ」という悟りの境地に達する。「父に覚えた鬱陶しさも、母に覚えた鋭い優しみも、ともに怖れの変形に過ぎないものだったのか。」と感じ、「その怖れが、親でさえ頼りにならないことを知ったために、消え」ていく。そうして、「吁希子は、両親に対して一様に穏やかな優しい気持ちを抱くようになった。」そして、「自分の主張を言い募る」ようになったのである。

・その後：「彼女は突然、親たちに永生きしてもらいたい、丈夫でいてもらいたいという思いに激しく襲われ」、「親たちが本当のことを知ったならば、どんなに嘆くであろうと思えるような状態が生じてからは、一層そうであった」から、これらの気持ちは、「一種の所有欲なのではあるまいか」と戸惑ったくらいである。」そうして、吁希子は、父が「最早や、全くといってもいいくらい怖くなかった。」一方、母のほうが却って彼女に「一抹の怖れを感じ続けさせる結果」となったのだった。その怖れは子供を産めないことに起因すると考え、「子供を産み、自ら母親の気持ちを知り、また知った女として母親に認められ、その世界を通じて本当に判り合える仲になった時にこそ、女親というものに全く怖れを感じなくてすむようになるらしい」とする。だが、「肉体上の理由から、母親になることは奇蹟なくしてはあり得ないことなので」あるのだから、「母に対する彼女の一抹の怖れ」は、「母が亡くなるまで続くのであろう。」とある。

今まで、本文より抽出してきた吁希子と両親とのつながりをわかりやすく表にしてみる。

# ・吁希子と両親との関係

母	父	
叱られる 惨めさ・身近な怖れ 親しみ	叱られたことは ない 恐怖感・緊張	少女時代
叱られるのが減る 怖れが減る 優しい気持	煙たさ・拒否 鬱陶しさ	十五・六歳
穏やかな優しさ	親は頼りになら ない 怖れがなくなる	動員された後
一抹の怖れがある (死ぬまで) 子どもを産めない 本心に判り合えない (劣等感)		その後

これらの両親と吁希子との関係を本文中では、「一応、標準的な型のもの」と呼んでいる。吁希子は、十五・六歳で戦争を体験しており、現在、「東海道の新幹線はまだ工事の最中」であることから、この戦争は太平洋戦争をさすことになる。だから吁希子の少女時代とは昭和初年代と推定できる。この頃の日本の社会はまだ、家父長制が強く、父親の存在が絶対的であるので、これらの吁希子と両親とのつながりは、当時の親子関係としては、本文中にあるとおり、「標準的な型のもの」といえる。しかし、戦時下でない平時の女性一般の成長過程と両親との関係から考えると、やや異なるのではないか、と思える。本文中から吁希子に特徴的な点を挙げてみる。

## 一、幼少時期に父とのつながりが薄い。

## 二、戦争を体験している。

三、動員された後、吁希子の親に対する情は「所有欲」ではないかと考えている。

四、彼女は、子供を産めないことで母親に対する恐れ―劣等感を抱いている。

特に父親との関係が希薄なようなので、父親との関係について焦点をしばっていこう。

吁希子の幼少時、一緒に食事をしていても父に話しかけられることさえ稀な状態であったが、兄はいつも叱られており、そのうち自分がその位置につくのだと考えていたことなどから、父親はこの時代の父親の一般的な形、つまり幼い子供への接し方が判らない状態であったと考えられる。年に何回かは遊びに連れて行ったり、物を買ってやると言われても、吁希子は気が休まらないことから推測できる。十五、六歳になっても父親に殆ど関わりなく成長し、戦争を契機に一気に自立の道をたどった感がある。そして東京へ出て独立、長い独り暮らしの中で異性を知り、破局をむかえる。次の男性と一と深い関係になっても、「結婚するかどうかはまだ判らず、結婚したとしても、父がそれで本当に安心するとは言いきれなかった。」しかし、結婚したのも知らずに父は他界した。趙一とは、初めの間はよかったが、次第に冷えきって崩壊の危機にさらされるようになる。

これらが吁希子の生い立ちである。次に吁希子が成人してからの父との関係についてみていきたい。

## 二、成人後の吁希子と父の関係

幼少時の父親は、一章で述べた如く、吁希子にとって恐ろしい存在であったが、吁希子が成人してからの父は、優しい存在であったことが分かる。では、いつ頃から、どういう風に変化したかを本文中より引用してみる。

吁希子は、父の病状が悪化して、危篤の電報が今にも届きそうな非常に寒い日、「今夜あたりが危いな」と思う。そして、夜遅く、まだ結婚していない趙一のもとからの帰宅途中に、道端の焚火を見つけ、あたりに行く。その時の心情を次のように書いている。

彼女は威勢よく燃えている焰の芯の部分が金色に輝いているのを見詰めながら、自分の胸を締めあげていた覚悟が、暖かな、広やかな覚悟に変わってゆくのを感じていた。そうして、物心ついてからそれまでの父との標準的な間柄が特別の不思議なものに変じたのは、実はその時からではなかったろうかと、彼女は後に考えるようになったものだ。

（初版『不意の声』一六頁三行―七行）

吁希子と父はこの日以来、「特別の不思議な」関係、つまり自分を落ち着かせ、緩やかな安堵感を生じる存在としての親子関係に変化している。

彼女が焚火に引き寄せられたのは、父の寒さ嫌いの印象を暖めてやりたかったからであり、父のほうでは又、彼

女の胸を締めあげている覚悟を暖かな、広やかなものにしてやろうとして、そこへと誘ってくれたに違いない。

(初版『不意の声』一六頁一二行―一四行)

ここでは、吁希子と父が互いに思いやりを交わし合っており、上下関係や怖れなどない相互の心の通い合い、親子の情が感じられる。

そして、吁希子の予感通り、この寒い日に電報が届き、自分のアパートに電話がない吁希子は、鮎屋で電話をかり、実家へ電話をかける。その時に、初めて父が出現する。

天井際のそのテレビの左手に父の立姿が宙に架っているのである。見馴れた彫りの深い顔に、見馴れた眼鏡をかけて相好を崩し、少々前屈みに上から優しい眼つきで見おろしている。

「そうか、来てくれるのか」

父は更に笑顔になりながら、上唇が薄く、下唇は厚い口許でそう言って、彼女に頷いてみせた。

(初版『不意の声』一九頁一五行―二〇頁四行)

ここでの父は、まだ生きていて、優しさが強調されている。

吁希子は電話をかけながら、

父は自分が行くまでは必ず待っていてくれるに違いないと思った。

(初版『不意の声』二〇頁八―九行)

そして、電話を置き、自宅へ帰り、次の日になると、早速身支度を整え、飛行機で実家へと向かう。機中で、「朝日にき

らめきわたって」いる「景色を眺めている」と、

父は必ず待ってくれるに違いないという感じが一層強くなり、一方では父が飛行機ぎりぎりでもあったことを思い出した。(中略)彼女は昨夜あのようにして訪れた今の父は、こうして自分が機上にあることを既に知っており、苦笑をしながら頷いてくれ、そうして決して事故など起こらぬように守ってくれていることであろうと思うのだった。

(初版『不意の声』二三頁一四行―二三頁五行)

とあり、実家へ到着すると、父はまだ生きていてくれ、やっぱり父は待ってくれたのだなど、彼女は思った。

(初版『不意の声』二三頁二三行―一四行)

ここでは、吁希子は執拗に、父は自分のことを案じ、自分のために「必ず待ってくれる」と書いている。そして、結果は、父は吁希子のためにやはり待っていたのである。ここでも、父が吁希子のためにだけ存在し、吁希子のことのみを気遣う優しい慈しみを持った人物として描かれている。

その他、吁希子が成人して父のことを思い出した次の描写がある。

吁希子は女学校に入ったばかりで、朝の支度にも、電車通学にもまだ馴れていなかった。(中略)

定刻までに校門へ走り込むことは、最早やおぼつかなかった。彼女は、「行つてまいります」と言うのも靴を突きかけながら済ませ、一瞬で格子戸を明け締めして、駆け

だそうとしたが、

「おい。ちょっと待て」

と父の声がして、戸が明けられた。あの挨拶は何だと、自分も今日こそ父に叱られることになった、と彼女は怯んだ。が、それまで彼女のあわただしさを咎めもせぬ代り、感じている風もなかった父が、こう言ったのだ。

「落ちついてゆけよ。怪我だけはするな。遅刻をしてもいいから、落ちついてゆけよ」――

（初版『不意の声』九二頁六行―九三頁四行）

父は成人後、吁希子が思い返してみると、吁希子のことを心配し、大切に思ってくれていることが、この描写にあらわれている。

また、父が危篤の際、吁希子が実家に帰り着いて、父の病室へ入った時のことである。父は、吁希子を見ると、「見覚えのある小豆色の紙入れ」から、

「取っておけ。旅行は要るから――」

これまでも彼女が帰省するたびに、父は往復の旅費の端数を大きく切り上げたぐらいの額のお金をくれるのだった

（初版『不意の声』一二七頁一四行―一六行）

その上、父の病室の隣で、家族で炬燵に揃って会話をしている状況での

母が吁希子を顧みて、真顔でいった。「口ではあんまりおっしゃらないけれど、独りでいること、心配なのに違

いないもの」

わきから弟が口を挟んだ。

「おやじには姉さん凄いい美人に見えるらしい」

（初版『不意の声』三三三頁三行―六行）

という描写からわかるように、昔、吁希子に怖ろしさを感じさせた父ではなく、常に優しく、吁希子のことを案じてくれる人間なのである。そして、吁希子は、その優しい父親の姿を知らないまま、成人し、成人してようやく父の本当の姿を知るのである。

### 三、亡父の出現の変遷

亡父が出現し、その奨め（不意の声）で、吁希子は前述のとおり、三つの殺人をするが、父の現れ方に変化がある。

初めて現れたのは、まだ父は存命中で、鮎屋の天井際のテレビの左側である。その時以来、常に左手に出現する。左―扶く（タスク）の意味の通り、吁希子に安心感、安堵感を齎すもの、つまり心の救いの存在として出現するのである。

吁希子が、「魇一と兎角喧嘩をするようになったが未だ大して激しくなかった時分」のことであった。「夜更けに、魇一が友だち二人を伴って帰宅」する。そして、魇一は帰ろうとする友だちを無理に引き止め、吁希子と「二人きりで残して行かれて、たまるもんか。」と言いはじめる。吁希子は「疲れと腹立たしさと屈辱感と、魇一に対する憎しみが凝り固ま

って」起ちあがることさえ大儀になった。そして吁希子は亡父を求めるのである。この時、本文中で、初めて亡父は亡父として出現する。

吁希子の視線は部屋の左の隅のほうを見あげていた。彼女はそこで亡父が大きく頷くのを見、自分の微笑がまた少し大きくなったのを感じ、そして自分がいつの間にか亡父を求めたこと、自分ひとりではないときに亡父を求めたのは今夜が初めてであること、先程から微笑を交わし合っていたことを遽かに知る。

「辛抱しろよ」

引き明けてあるガラス戸を背にして、亡父がそう言つて、見馴れた眼鏡の中でまた微笑した。吁希子は指先を見詰めるふりをして頷き、気持がすっかり楽になっているのを感じた。(中略)

そして、笑った。吁希子は片手の曲げた指先を見詰めて続けながら、自分の両頬に、まだ消え去っていない微笑を感じた。

(初版『不意の声』四六頁一二行―四七頁九行)

吁希子は亡父を求めて、亡父が訪れて微笑してくれたことで、「気持がすっかり楽になっているのを感じた。」亡父が、扶くの働きをしていることがわかる。そのうえ、吁希子が慥一と住む家を借りようかどうかと悩んでいる時に、意見を求め、亡父の「微笑と賛意」によって、安心して借りることに決定しているという記述もみられる。また「深夜に酔って帰宅し

て散々手古摺らせた慥一が漸く寢床に納まった後、「彼の背広をハンガーごと足許に叩きつけたとき」に、

「お父さん。これが近頃のわたしなんですよ」

と部屋の左手のほうへ向い、自嘲を籠めて言った。と、既に亡父はそこに居る。

「見てくださいましたか、今のわたしを？」

亡父は微笑しながら、頷いた。いつもよりも、更に前屈みのように見える。彼女にすっかり頷いて見せようとして、そうなっているらしかった。頷きながら、微笑している亡父の眼鏡の中の視線は落ちた背広のほうにはちらりとも行かず、真直ぐに彼女のほうへ注がれている。

「寝ればいい。さ、寝ればいい。――判ったか？」

微笑しながら、亡父は言い、彼女は自分も頷きながら微笑していることを知った。

(初版『不意の声』七〇頁一五行―七一頁七行)

という記述がある。吁希子は、父の微笑を見ると、自分自身まで気持ちやすつとするのだ。しかし、そのうちに亡父は、ただの安心感を与えてくれる相手から、微妙に変化してくる。吁希子は、「帰省をすると、却って亡父を東京に待たせているような気持ちになりさえ」する。そして、

ただ亡父とのそのような時々の対面で、吁希子が最近になって新しく気づいたことは、亡父が次第に若くなってきたことであった。本当の亡父になって以後の亡父に、彼女が初めて会ったのは、いつのことだったか、その時

はこちらから訪れを求めたのか、あちらが不意に訪れてくれたのか、又どういう際であったか、彼女は記憶にないのだが、最初の頃の亡父は亡くなった頃のように年老いていた。が、気がついてみると、近頃の亡父は実に若い。しかも、思いかえしてみると、亡父は年々少しずつ若くなってきたように思える。

（初版『不意の声』七二頁一行―六行）  
と書かれている。

呬希子は、父を、東京で、自分と常に一緒にいてくれる男性―自分だけの男性と考えはじめ、呬希子の年につりあう男性であるように、呬希子の目に若く見えはじめていることが読みとれる。また、つぎのような描写も続いている。

呬希子が今、時々会っている亡父は、横髪にちらりと白髪が混りはじめたばかりである。一度も太ったことのない人だったから、太ってはいないが、顔幅はたっぷりしており、髭は綺麗に当たられ、湯上りのように色艶のいい爽々しい顔つきをしている。梢々前屈みの姿勢も今では年寄りくさい感じは全くなく、ただ彼女をしっかりと見おろすためにそうなりがちになるらしい。

（初版『不意の声』七二頁七行―一二行）

ちょうど、呬希子の年齢とつりあう、中年の父であり、とても小ぎれいで、スタイルもよい爽やかな男を連想させる。呬希子の恋人として、ぴったりである。

そうして、亡父のそのような若さからすると、呬希子

は十一、二歳ごろの彼女であらねばならないのだ。彼女に父が最も怖れを感じさせた時期である。が、亡父は当時とそっくりの若さに還った最近でも、彼女に必ずやさしい笑顔を見せてくれる。それ以外には、全く表情の失せた死顔をひととき示したことが二、三度あるだけだが、その死顔もまた忽ち若くて、やさしい笑顔に戻ってくれる。彼女はそんな亡父に会いつけてみると、少女時代の彼女も又、いつもそのような優しい父を見馴れていたような気がしてくるのだった。近頃の彼女は、父の若かった頃の怖い感じを最早やどうしても蘇らせることができない。今の彼女に思い浮かべることのできる当時の父は、鬢に白髪の混りはじめたばかりの色艶のいい横顔で、張り切った皮膚を引っ張られるようにして笑っている父のみである。若い彼女を怖れさせた父や、全く怖くはないが年老いている父は、彼女の記憶に蘇らなくなってしまうようだ。

（初版『不意の声』七二頁一二行―七三頁六行）

この描写から、若くみえる父は、呬希子の十一・二歳頃の時の父である。呬希子が父を最も怖れていた時分である。しかし、今訪れる父は、若く、優しく、素敵な父であり、その父は、東京で呬希子と暮らしているような気がするのである。つまり、最初は、呬希子に安心感や、意見決定の手助けだけをしていた、左（扶くの意味）に出現していた父が、それだけでなく、呬希子の男性としての相手に相応しい男になって



きている。

この、父が若く見える事は、性衝動と関係があるようなので、フロイトの説を引用しながら考察していきたい。

#### 四、一般的な、女兒の性的発達状況と吁希子の相違

フロイトは、性にだけ焦点をあてた発達段階を分析している。

一般にフロイト以前は、性欲は思春期になって、第二次性徴が発達するにつれて開始されると考えられていた。しかしフロイトによれば、人間の性欲活動は、出生後間もなく現れると言う。人間の性的な面だけに限定した発達過程を、フロイトの理論の流れを汲む、P・ジャカールの『深層心理への招待』（山田悠紀夫・引田稔訳、昭和五八年九月二五日、思索社）から一部まとめながら引用する。

フロイトは、幼少時からの女兒の性的な発達段階は、

四段階に分けられ、次の如くであるという。

第一段階：「自分を養う母への愛着の中に存在している。

男の子と女の子との間に、心理的な相違はみられない。」

第二段階：「男の子は保護したいという欲求、女の子は保護されたいという欲求を示す。自分と同性の親からは

離れ、敵意をもつのに対して、異性の親に対しては愛着するようになる。こうした傾向はすでに性的な性質の顕現であって、これはエディプス的段階」である。

第三段階：「『罪業感』という感情が現われる。道徳意識がエディプス的葛藤から生まれ、同性の親に対する敵対心を退ける。」

第四段階：「同性の親との『同一化』が出現する。（中略）もしこのような発達になんらかの障害があると、無定形なもの、ドミニクのように不確かなもの、同性愛、エディプスあるいはエレクトラのように犯罪者のものになる。しかしながら、一般的な規則としては『潜在的』期間の発現であって、それは思春期の目覚める頃までつづくことになる。この期間にコンプレックスは『克服』される。」

（第四部エディプスコンプレックス）一九四頁―一九五頁）

要するに、一般的に、普通の女の子は最初は母親に対して愛着を持つが、そのうち母親には敵意を持ち、父親を愛着するようになる。これが、エディプス・コンプレックスであるという。しかし、成長するにつれ、罪業感が生じ、母親への敵対心を退ける。そして母親との同一化（子供の自我が親に同化する。親のようでありたい、親の模倣をするなど）を行うが、「女の子の場合は、やや複雑である。」このようにして、エディプス・コンプレックスは克服されるのである。

さらに、フロイトは『精神分析入門（下）』（新潮文庫）（高橋義孝・下坂幸三訳、昭和五二年一月三〇日、新潮社）で、「超自我がエディプス・コンプレックスの運命ときわめて密接に

結びついて」と述べて、「エディプス・コンプレックスの放棄とともに子供は、(中略)両親との同一化が大いに強められることになる」と述べている。そして、フロイトは次のような言葉「男の子が自分を父親と同一化する際には父親のようであらうとするのですが、父親を選択の対象にする際には父親を持つとする、すなわち所有しようとするわけです。」で同一化Ⅱ所有と定義づけている。

すなわち、発達過程の第四段階で、両親との同一化(両親を所有すること)を行って、超自我(両親との接触という対象関係を通して形成されるもので、しつけにともなう叱責、命令、罰などの本能衝動の禁止が自我の中に取り入れられ(内在化)、独立した精神機能となったもの)を獲得する。(注5)

さて、フロイトが言及するように、一般的にいうと、女の子は、最初のうちは母親に愛情を持つが、次第に敵意を持ち、父を愛するようになる。これがエディプス・コンプレックスであるが、どんな女の子でも普通一応その過程を経る。このエディプス・コンプレックスは深まると父を性的に愛する、という形にまでなることもあるが、このような願望は、決して満たされるものではないので、やがて次第に消滅していくようになる。フロイトによると女の子の場合、完全に消滅することはないようだが、成長するにつれ、父を性的に愛することは道徳的にもあり得ないので罪業感が生じ、また他の異性が恋愛対象として存在してくるのでエディプス・コンプレ

ックスは消滅し、両親を所有しようとする――同一化を行うようになる。そして、超自我を形成し、成人する、という過程を歩むらしい。この『不意の声』の吁希子の場合は、どうであろう。

吁希子の少女時代は、母には愛情を感じているが、父に対しては愛情を持たない。むしろ恐怖感や煙たきなどを抱いている。つまりエディプス・コンプレックスの時期が存在していない。戦争中に学徒動員され、そこで初めて「これまでは如何に親たちの庇護を受けていたか、自分が如何に親たちを頼りにしていたか」ということに気づき、「親だって最早頼りにはならないのだ」と自覚する。そして、戦争が終了すると、「自分の主張を言い募る」ようになり、「驚くほどの大胆さ」をみせるのである。ここで、吁希子は一応親の依存から離れ、自立したことがわかる。しかし、この自立は通常の過程を通過してなされたものではなく、つまり精神的な発達段階を経ずに得たもので、後に何らかの支障とか影響をもたらすものとなっても不思議ではない。その後吁希子は、「親たちに永生きしてもらいたい、丈夫でいてもらいたいという思いに激しく襲われるのだった。」そしてその親への思いは、「一種の有欲なのではあるまいか」と感じている。つまり吁希子は、親たちを「自分の所有物に見立て」ているのである。エディプス・コンプレックスを持つことなく、戦争によりいきなり親と引き離され、内的葛藤なしに無理に自立までの段階へと成長している。戦争という大きな要因により、一気に超自我

を形成するところまで成長するのだが、母親には、「いつまでも一抹の怖れ」を感じ続ける。「子供を産み、自ら母親の気持ちを知り、また知った女として母親に認められ、その世界を通じて本当に判り合える仲になった時に」、「全く怖れを感じなくなてすむ」らしいが、「彼女の場合は肉体上の理由から、母親になることは奇跡なくしてはあり得ないこと」なのであり、だから、「母に対する彼女の一抹の怖れ」は、「母が亡くなるまで続く」のである。「前の異性」との破局、今また、遁一との家庭も崩壊の危機に瀕しているとき、意識下に潜在的に存在するエディプス・コンプレックスが、本人自身も他の人も気づかないのに、少しずつ頭をもたげてきたのではないかと推察される。

そうすると次のように解釈できる。

若く見える父は、吁希子の十一・二歳頃の時の父であり、十一・二歳といえば、普通の少女が父に対してエディプス・コンプレックスを抱き、父に憧れる年齢である。しかし、当時は、吁希子は父に「最も怖れを感じて」いた。今訪れる亡父は、その頃の父でありながら、優しい笑顔の似合う父である。そして、吁希子に、にこやかに微笑みかけ、広やかな暖かい心で接してくれる。また、吁希子が懇願しなくても彼女を案じ、訪れてくれるのである。だから吁希子にとっては、最も大事な者がこの父となる。一方、今現在の夫である遁一は、非常に冷たく「彼の彼女に対する見方、その浪費の自分ひとりのためのして来方、身勝手さ、無責任ぶり、すべての

非は彼女にあるとして一切の協力を拒絶し続けてきた不誠実さ」に吁希子は、「彼に対する憎しみが募り切っ」ている。そこで、頼るものが父以外に全然いなくなった吁希子に、初めは扶け、救い、安堵感を与えるためだけに存在した父が、まだ今まで現れないで潜在的に残っているエディプス・コンプレックスの対象たる存在として浮かび上がってくるのである。そして、吁希子は優しい父をいつしか自分の恋愛対象にしてきている。それで、父の幻影が吁希子に見えてくるのである。

## 五、三つの殺人について

### ア、母親の殺人

吁希子が殺人の対象にまず母親を選んだのは、「大丈夫でなくて大変なことになった場合」母が「どんなに驚き、嘆き、悲しむことだろう。」「そんな目をみせなくても済むように、母を三人の第一の人間に扱ふべきだと思いついた。」という本文中の理由だけでなく、潜在的なエディプス・コンプレックスの顕現による、と考えられる。そのように結論づける理由を本文を抽出しながら、考察していきたい。

父が亡くなったとき、形代として母の髪を父と共に納棺した。そのことを吁希子は、次のように言っているのである。

母が今日まで生き永らえていたのは、あのときの形代のお陰というものののだろうか。そう考えるなり、吁希子

は今この母があゝの形代みたいに突然小さくなってくれれば、どんなに有難いことかと感じ

（初版『不意の声』九六頁六行―八行）

母は父の妻であり、絶対的な恋愛相手である。父が常に母の髪といっしょにいて、いつも母を守っているから、「今日まで生き永らえ」ることができたのである。吁希子が入る隙間はない。そう思うなり、母が形代みたいに小さくなればよいと思うのだ。矛盾したような感情が浮き彫りにされている。母に対して敵対心を抱いているのである。母との会話を交わす、次のような箇所もみられる。

「――けれど、怒ると、出て行けなんて言うこともあるし、打ったりしたこともありますしね」（中略）

「たまのことなんでしょ？」

案の定、母は言った。

「――それじゃ、まあ大目に見てあげるしかないわね。男の人のことだもの、外で面白くないことがあって、虫の居所のわるい時もあるでしょうし。――でも、それにしても、あちらはよくできていましたよ」と母は明いている仏壇のほうを指して、「よく大きな声で怒られたものだけれど、出て行けと言うことと、手をあげるということだけは決してなさらなかった。本当ですよ、ただの一度もありませんでしたよ」

「ええ。わたしにも手をあげるなんてことは一度も……」と吁希子は言った。

その間、彼女は方法を考え続けながら、母を眺めていた。

（初版『不意の声』一〇六頁一三行―一〇七頁一行）

吁希子は尅一から撲たれて、顎のあたりに「ひどい湿疹の終末のような」あざをつくっているというのに、母は一度も父に殴られたことなどない。母は父に大事にされているのである。吁希子もちろん、大切に育てられ、父から手をあげられることはなかったが、それは娘としてである。母のように、父の妻ではない。だからこの会話をしながら、吁希子は、母を殺害する方法を考え続けているのである。

以上のように、本文から、吁希子は母を、父をめぐる恋愛のライバルだと思っていることがわかる。一方、フロイトの説に従うと次のようにもいえる。フロイトは、「エディプス・コンプレックスの消滅」（『フロイト著作集六』昭和五七年六月三〇日、人文書院、三一〇頁―三一五頁）で次の如くに言う。

女の子のエディプス・コンプレックスは、父親から贈物として子供をもらいたい、父親の子供を産みたいという願望――それは長いあいだ抱き続けられるが――において極点に達する。

吁希子も、フロイト流に言うところ、エディプス・コンプレックスが極点に達すると、父親の子供を産みたいというようになるのであるが、本文中にあるように吁希子は石女であり、母親には子供を産めないことで劣等感をもっている。しかも

母は父親の子供を産み、吁希子の父親に庇護されたいという欲求に対してはライバル的存在である。それで、一方では永生きしてもらいたいという気持ちを抱きながら、一方では母親の存在を拒む―殺すという矛盾した行為をおこすのである。

### イ、子供（まさみち君）の殺人

次に第二の殺人、前の異性の子供―まさみち君の殺人の意味を考えていきたい。そのためにまず、まさみち君の様子を本文から抽出してみる。

吁希子は、まさみち君を殺害するために、保育園へ出かけ、そこで園児の様子を観察する。園児たちはみんなで合奏をしている。

太鼓が入った時、子供は両手の鈴の楽器を振り鳴らしながら、実に嬉しそうな顔をした。いくら子供でも、これほど嬉しそうな顔をするのは余りあるまいと思えるほどの嬉しそうな顔なのだった。――曲が又そこへきた。

――今度も、子供は嬉しくてならないような顔をして、太鼓と共に元気よく両手の楽器を振り鳴らす。他の園児たちも、曲がそこへくるのを待ちかねるようにして楽器を振り鳴らし、笑顔になったり、隣り同士で顔を見合わせたりしてはいるが、子供の場合は格別だった。

（初版『不意の声』一四五頁六行―二一行）

この描写から、まさみち君が非常に楽しそうで、幸福な様

子が伝わってくる。「子供の場合は格別だった。」という表現で、他の子供たちよりも、一層嬉しがっている様子がわかるのである。

子供は皆よりすこし小っちゃい。水色のスモックの両肩が一入あどけない感じだが、栄養と運動が満ち足りているらしかった。健康そうに日やけしており、そして曲が例のところへくるたびに、その両頬が弾むように持ちあがり、眼が細くなる。嬉しさのあまりなのだろう。そこへくると歌うのは忘れがちになり、口許まで嬉しがるのに気を取られている。

（初版『不意の声』一四五頁二一行―二五行）

ここでも、まさみち君は健康であどけなく、幸せ一杯で日々の生活に満足しきっている様子がよくわかる。そして何度も眼を細めて嬉しがっているのである。次のような描写もみられる。

その雑種の仔犬のような子供には、色が白くて顔立ちの線の鋭い父親を思わせるところはなかった。母親似なのかもしれない。ただ、嬉しそうな顔をする時の眼の細まり方、思いきった笑い方は、彼から伝わっているのが、はつきり判るのだった。とすると、若しも彼と自分との子供が産まれており、その子が男の子であったとすれば、やっぱりこういう実に嬉しそうな顔をして笑うのかもしれない、と吁希子は思った。いや、笑い顔ばかりじゃない。半分くらいはこの子供のような子であるというこ

とはあり得る筈ではないのだろうか。

〔初版『不意の声』一五二頁三行〜九行〕

まさみち君の笑い顔、特に「嬉しそうな顔をする時の眼の細まり方」が吁希子の前の異性に似ている。まさみち君の父親と、付き合っていた頃はまだ、吁希子は子供を産める身体であつたのである。もしその時、子供を産んでいれば、母親に劣等感を持たなくてもすんだのである。そして、吁希子の子供もまさみち君のようだったかもしれない。しかし、まさみち君の父親との恋愛関係はうまくゆかず、吁希子は子供を持てないで別れてしまった。後に旭一と結婚するが、既に子供を産めない身体になっていて一生そのことが、母親に劣等感を抱かせる結果となつたのである。

吁希子がまさみち君の幸せに拘泥していることは次の場面でもよくわかる。

「途中で赤ちゃん見に帰った時、叱られなかった？」

小さな暖い、子供の手を丸く握り込んで歩き出すと、

吁希子は訊いてみる。

「叱られなかった」

「お父さんにも叱られなかった？」

「叱られなかった」

その言葉を言うたびに、子供の口調は少し舌足らずな感じになった。

「お父さんにぶたれたことある？」

「ぶったりなんかしない」

「お母さんは？」

「しない」

「お友だちにもぶたれたことはないの？」

「みやちゃん」

「幼稚園のお友だち？」

「うん」

「その子がぶつの？」

「うん。あのね……」

「ええ」

と吁希子は促す。

「あのね、リボン結んであげるって言ったら、ぶった」

「どうして！——坊やがリボン結んであげると言ってるのにどうしてぶつの？」

子供は、ちょっと黙っていてから、

「しらない」

と言う。知らないわけではないらしい。うまく言えないのであろう。それに、その時のことを思いだすと、口惜しいのかもしれない。鬼ごっこか何かの時に、その女の子の衿元のリボンを掴んだら、解けたのかもしれない。結んでやらねばわるいと思って傍へ行ったら、怒っている相手がいきなりぶったというような次第なのかもしれない。

——吁希子は訊く。

「それで、坊やはどうしたの？」

「ばか、って言ってあげた」

言いざま子供はひとつだけ不意に歩幅を大きくした。片手を握っている、吁希子がちよつと引つ張られる恰好になったほどだった。子供心にも、余程口惜しく、恨んでいるのであろう。

「そうね。そりゃ、ばかって言うわよね。」

引つ張られる恰好から直りながら、吁希子は子供の顔を覗き込んで言った。

（初版『不意の声』一五九頁九行―一六一頁一〇行）

まさみち君が、叱られたか、ぶたれたことがあるか、というのを執拗に尋ねている。まさみち君は父にも母にも叱られたことがない。父母の愛情を一身にあげ、育っているのである。吁希子は、尨一に愛されず、死ぬほど苦しんでいるというのである。彼女はまさみち君が、幼稚園の友だちにぶたれたことがあると聞いてやつとこの会話を終えている。

今、吁希子は尨一に家を追い出され、撲られ、不幸この上ない境遇である、一方、まさみち君は幸せ一杯に生きている。嬉しそうな笑顔、前の異性とそっくりな眼の細め方、自分にももしかしたら持ち得た筈の子供、それがもとで一生続く母への劣等感、男性たちへの意識下の怨念、それらが複雑に絡み合い、輻輳し合って、まさみち君を殺害することになるのである。

## ウ、男の殺人

最後に、男の殺人の意味を考察していきたい。吁希子は、現在の自動的に錠の掛る家に引越してくる前、公営アパートに尨一と共に住んでいた。その時よく吁希子は、尨一の背中を洗ってやっていた。しかし、ある日吁希子が、「洗わせてと言った時、いきなり怒鳴った」のである。そして、「肘鉄砲を寄越し」、吁希子は「ひどい鼻血」で「洗い場、真っ赤」にしてしまったことがあった。そのことを思い出しながら、吁希子は、空想の中でゆきずりの男を自宅に連れ込み、浴室で男の身体を洗ってやる。そして、「桶の中にタオルで蔽って沈めておいた料理ナイフ」を「男の左の胸の鳩尾近いところで動いている部分に突き込んだ。」「吁希子が尨一の肘鉄砲をまともに受けて、公営アパートの湯殿に血を流した時、」尨一は「不愉快そうに彼女」を見て、「湯を汲みあげると、自分の足許にだけ湯を流して出てきた。」吁希子はそれと同じように「男から受けた血を流すと、もう一杯やはり足許に流し、男をそのままにして出て」行く。このようにして吁希子は男を殺害したのである。そして男を冷蔵庫の中におしこむ。

さて、ではこの男は一体何を象徴するのか。本文中に次のような表現がある。

内にいる男は、すっかり冷えきってしまったことだろう。男はいくつで死んでも、同じなのだ。

（初版『不意の声』一七二頁二二行―一四行）

ここには、男はどんな年齢でも男には変わりがないという真理がみられる。吁希子の男というものの全体への恨みのようなものが込められている。男という言葉でだれであるか限定しない。だれであっても、どんな男でもいい。男を殺すのである。結局、男は吁希子の前の異性や虺一のように、吁希子を苦しめる存在でしかない。吁希子にとってどんな男であらうと男は男、同じなのである。恨みや情念の発する根源たる男そのものは、抹殺するしかない。

まさみち君の殺害の場面でも、吁希子が保育園で園児達を見ながら感じた次のような記述がある。

人間に、男女のほかに、子供というものがあることを突然発見したように、吁希子は妙な気がした。そして、思うのだった。——自分たちおとなと子供とは、男女の人間のように別個のものではないのである。死にさえないければ、子供は必ずおとなになるのである。死にさえないかっただけは全く一人もない筈なのだ。虺一はこれらの水色のスモックどものようだったのであり、自分は桃色のスモックたちのようだったのだ。それが、次第に大きくなり、おとなになり……。いや、ちがう、と吁希子はその場で、頭を振った。子供の形態がそのまま大きくなったのがおとなであった場合には、おとなの頭はひと抱えもある大きさであらねばなくなる。——

（初版『不意の声』一四九頁一四行―一五〇頁五行）  
吁希子は、子供たちを見ながら、その無邪気さにいつまで

みても「飽きない」ような気持ちにさせられるが、ふと気づくのである。大人は、これらの無邪気な子供のままである筈はない。しかし、この子供がやがて大人に、男になる。大人になった男は、吁希子に害を与える存在であり、抹殺するに値する。ここにも、男全体に対する恨みや憎しみが現れている。吁希子の男というものに対しての恨みが、男の殺人をさせたのである。

## 六、巡査の意味するものについて

内在していたエディプス・コンプレックスが、何かを契機として発現し、それが強くなっていくと成長に伴って獲得してきた超自我がこわれてくる。そして、教師とか警察などの権威が認められなくなり、そういうものも何の役にもたたないと思え、なんとなく小馬鹿にしたいような気分になる。やがて、人間の基本的本能たるイドや自我のままに、行動し始める。それで、吁希子にとっては空想裡の殺人も現実のものとなるのである。そういう状況が次にあげる部分によく感じられる。

吁希子は男を殺害し、冷蔵庫に入れる。そして、鍵を持たないまま、「自動的に錠の掛る扉を締め」てしまい、折柄雨の降り始めた夜の玄関先に、中に入らず佇んでいる。どうしようもないので、中に入る手助けをしてもらおうと巡査を呼びに行く。巡査は、吁希子が家に入れるように、あれこれ「泥



棒みたいなこと」をやってみる。吁希子は、その様子をみながら、次のような態度をとっている。

吁希子は心の中で言う。「ほんとに他愛ない、人のいいおまわりさん。あなた、ここが確かにわたしの家だという証拠があるの？ないじゃありませんか。泥棒の手伝いして下さっていることになるかもしれないじゃありませんか。そうでなくて、よかったですわ。でも、あなたみたいな気のいい方は、余っ程、注意なされたほうがよろしいですよ。それとも、気がいいんじゃないくて、職業柄の己惚れが、迂闊なことを平気でやらせてしまうのかしら。迂闊ですとも。今だって、わたしの目の前に近々と身を屈めて、一生懸命なんかに取りついていらして、隙だらけじゃありませんか。わたしのこと、自分の家へ入れずに困っている、うっかり者のおかみさんとして考えていらつしやらないようですね。おまわりさんって、皆さんそんなに気のいい方たちばかりだとすると、嬉しいわ。面白いわ。わたしが自分の家へ入れないで困っていることだけは確かですけれどね」

（初版『不意の声』一八五頁七行―一八五頁一六行）

吁希子の超自我（つまり、イドの動きをコントロールする働き）が少し姿を隠し、巡査を馬鹿にしていることで、罪業感から逃れようとしているのが判る。また、西成彦は『マゾヒズムと警察』（昭和六三年一〇月一五日、筑摩書房）で、「警察的なものが、不安であると同時に性的な刺激であり、苦痛

を課すると同時に快樂の源泉たりうる」と言うが、次のような表現がある。

巡査はすぐ黒いゴムの雨合羽に手を通しながら降りてきたが、先程よりも急に四、五歳若く見えた。三十になつたばかりかもしれない。

（初版『不意の声』一八二頁六行―八行）

吁希子の差し向けている懐中電燈の光の余りに掠められて、そこに気を取られている巡査のフードの中の顔は、また一層若く見える。

（初版『不意の声』一八五頁三行―五行）

吁希子の眼に巡査はどんな若くなってくる。巡査に異性を感じているのである。彼女の性的対象に適うように、巡査は若くなってくる。エディプス・コンプレックス、子供を産めない躰であること、前の異性とも遁一ともうまくいかなかったこと、母親に対する怖れ、前の異性の子供が憎いこと、さらに男そのものが憎悪・怨念の対象となるなど諸々の吁希子を取りまく現実、すべてこの満たされぬ意識下の心理―性的なものから発しており、軽蔑的にみていた巡査まで、無意識のうちに性的対象にみたてているのである。

## 七、吁希子のマゾヒズムについて

『不意の声』に突き動かされ、その命ずるままに、三人を殺害した吁希子の殺害方法や心理状態の変化について、この

章では考察していきたい。文章中の（記号）は、後に図式で用いる記号と一致する。

吁希子と埴一の夫婦関係は険悪であった。吁希子は、「夫に別の女性をもたれた妻でさえこれほどではあるまいと思えるほどの屈辱感と劣等感にのしかかられ」、絶えず埴一に「出ていけ」と言われていた。「双方で荒んでゆくばかりのような自分たちの状態のやりきれなさ」に疲れきり、どうにも抜けられない不安な心理にさいなまれ、衰弱疲弊状態の日常生活であった。（ア）もはや自分たちでは修復し得ない程の夫婦生活の中で、亡父の「不意の声」を聞き、それに従って殺人を犯す。吁希子の心には最早、両親から無意識に継承した道德的規範すらないし、超自我が消失したことで、亡父に支えられたという安心感から意識上に攻撃的な面が出て来る。その結果が殺人となるのである。（イ）

まず、母親の殺害について考察する。

その方法について吁希子はあれこれ想像する。吁希子にとっては「殺す」「殺される」という関係でなく、「往かせ、往かせられる」という行為の中で、しかも直接に「母と感覚を分けもつ」ことのない形の殺害方法でなければならぬ。肩を揉み、気持ち良くさせた母の「片腕を咽喉に廻し、片手で鼻と口許を塞ぐ方法では、直接母の体を圧しているのは、吁希子自身の掌や腕であり、母と直接感覚を分かち合ってしまう。物を使う方法では、「血をみせる残酷さ」を母に感じさせるからいけない。かといって「何の手応えもなしに母を往か

せる」のも承服できないし、一方では、母が吁希子に「往かせられたことを知りつつ」往かせたい気がある。たまたま、母が使っていた真座を用いるのが、そのどちらをも満足させる方法であるが、タイミシングを失ってしまった。結局「孝行娘ねえ」という美しい母の言葉を最後に、添い寝をした母の口に「タオルを詰め」、「ビニール風呂敷を目鼻のない母の顔にぴったりと添わせ」それを纏めて握りしめて、暴れないよう両手首を縛り、全身を寝ている母の身体の上に預けたまま、窒息死させる。母は、ストッキングで縛られた手首の、わずかに動く指先で、「じかにではなく」、「下着を距てて」吁希子の内股を抓る。つまり、お互いに間接的に感覚を分かち合いながら、往かせ、往かせられる方法をとっている。

子供の場合はどうであろうか。吁希子にとって「あり得たかもしれない子供の面影」を偲ばせた最も縁深い、「かわいらしい」子だからこそ、往かせるとするのが理由で、両手で首を締めて殺害している。苦しそうな子供の姿に「離してあげる。じっとしておれば、離してあげる」といいながら、結局はそのまま締めつけたのであるが、ちよつと手を弛め、「おばさんの言ったことは本当だとこの子にちらりと感じさせ」たかったのである。

次に、ゆきずりの男の場合を調べる。吁希子は湯殿で以前埴一にしたように、男の背中を流しながら、桶の中にタオルで蔽って沈めておいた料理ナイフで、「男の左の胸の鳩尾近いところで動いている部分」を刺す。そして血を流せるだけ流

したあとの男を「冷蔵庫の内」に入れるのである。

三人三様の殺し方をとっているが、そこに働いている吁希子の心理にはどこか似通ったものを感じる。殺害それ自体は、エディプス・コンプレックスの負の側面として、意識下に内在されていた隠れた憎しみが顕れたものであり、吁希子はこの殺害に自己陶醉し、憎しみと楽しみが交錯するような感を抱かせる。

しかし、母親の場合は、血を流す方法をとらなかつたり、直接感覚を分かち合わない方法をとる、など矛盾しているのだが、世間に排斥される何かや罪業感のようなものが、ほの見えるのである。(ウ)子供についても同様で、殺害行為をしながら、吁希子の言葉が正しい、ということの子供に判らせたい、という相矛盾したものが読み取れる。(ウ)

無防備で、気持ちよさそうに咽喉を突き出す男を一突きで刺し、冷蔵庫にまで入れるような残忍さをみせ、当然だと思いつつも、隠そうとする心理が働いている。「週に二回、塵芥の回収車が来るたびに、骨付きハムのように、少しずつナイロン袋の塵芥の内に突っ込んで」処理しようと考えているのである。(ウ)最後には、次のような描写がある。

冷蔵庫の扉を明け、蒼白い車内燈クルマノチンの光りを受けて冷たく眼を閉じている男の横顔に見入り、「こんなにおとなしい人なのに、どうして往かせてしまったのだろう。こんなにやさしい顔をしている人なのに……」と悔いと慕わしさに迫られる慰めを求めずにはいられなかった

(初版『不意の声』一八九頁七行～一〇行)

強い攻撃性を持って殺人を犯した吁希子も、そのよって起こる三つの原因を取り除くことで、落ち着いた、安定した心理状態になっていることがわかる。(エ)

エディプス・コンプレックスのあらゆる面を、P・ジャカールは、先程あげた『深層心理への招待』で、次のように述べている。

フロイトにとって、罪業感罪業感は道徳的な意識の目覚めと同時に、罰の觀念の起源である。道徳的な意識ははじめ権威としての形をもつて現れるが(超自我)、その後は理性的な形を持つ(意識的、かつ自由意志によって受容された道徳性)。医師マルセル・ロックはいみじくも、『超自我はエディプス・コンプレックスの継承者である』と述べている。正の側面としてのコンプレックス(息子の母親に対する愛)は、最も一般的には公然とした形で現れる。負の側面(父親に対する憎しみ)はこれに反して、密かな、隠れた形として現われる。というのは、前者が社会から受け容れられるものであるのに対して、後者は排斥されるからである。この後者の場合は罪業感、自己懲罰をつくり出す。それらのことから、最も一般的には夢の分析によつて明らかにされる。それらが存在するものと想像されるが、明瞭に見えるわけではない。この点からすると罪業感のコンプレックスは、結びつけられた場合には、エディプス・コンプレックスの第三の側面

であるということもできると思う。すなわち、第一は近親相姦であり、第二は隠れた憎しみである。罪業感はまだ同時に情動生活における第二段階であって、この第二段階は矛盾した表現の中に抑制されている。更に言えば、罪業感とは道徳的な生活の最初の段階を開くものである。

〔第四部エディプス・コンプレックス〕二〇八頁四行―六行〕

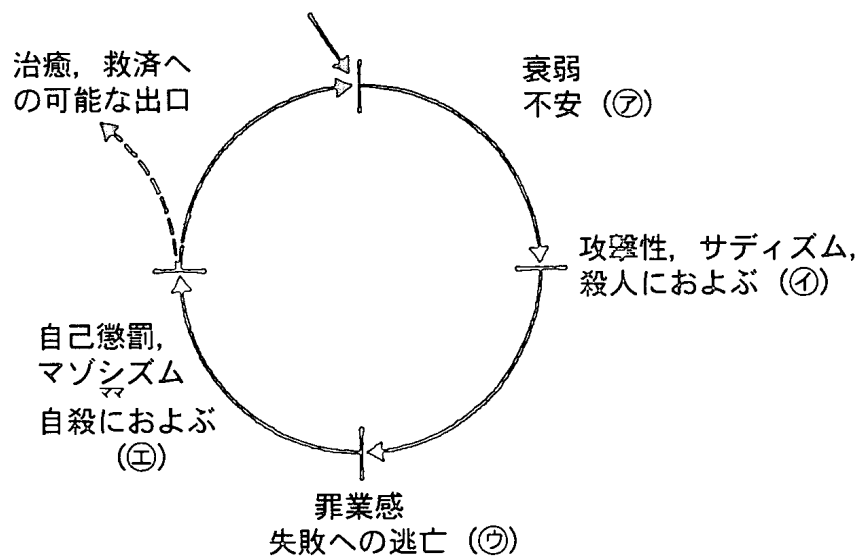
そして、このことを次のように図示している。記号(ア) (イ) (ウ) (エ) は筆者がつけたものである。

この図をみると、吁希子も、この図の通りに動いていることがよくわかる。図の記号はP・ジャカールの本を引用する前につけた記号(ア) (イ) (ウ) (エ) と一致する。

(エ) のマゾヒズムにあたる部分を、ここでは吁希子が、冷蔵庫に入れた男をながめる場面としたが、これは概して非常に解り難いと思われる。なぜならマゾヒズムの中で、最もはつきり解る、殴られて喜ぶという例のものではないからだ。しかし、フロイトの論文を読むと、道徳的マゾヒズムであることがよく判る。フロイトの「マゾヒズムの経済的問題」(『フロイト著作集六』昭和四五年三月二五日、人文書院、三〇〇頁―三〇九頁) という論文を一部引用してみる。

マゾヒズムは三つの形態で観察される。

一性興奮の一制約として、二女性的本質の一表現として、三生活態度(行動)の一基準として。これによってわれわれはマゾヒズムに、性愛的、女性的、道徳的という三



(「第四部エディプス・コンプレックス」209頁)

種類のことを区別しうる。(中略)第三の、ある意味ではもっとも重要な道徳的マゾヒズムという現象形態は、精神分析の研究によって概して無意識的な罪悪感であることが最近になってやっと判明するようになった。(中略)道徳的マゾヒズムの注目すべき点は、われわれが性欲として認めているものとこのマゾヒズムとの関係が曖昧に

なっているという点である。すべてのマゾヒズム的受苦には、通例、その苦痛が自分の愛する人によって加えられるものであり、その愛人の命令にしたがってその苦痛に耐えるという条件がついている。この条件は、道徳的マゾヒズムの場合には消滅する。問題は苦痛そのものである。

吁希子は、意識下で殺人を行い、無意識的な罪悪感を抱いている。そこで、自己懲罰的な意味で、道徳的なマゾヒズムに陥り、男を自分のものとしておきたいという意識がわき、冷蔵庫に入れて、ながめ、満足するのである。吁希子の道徳的マゾヒズムは、男を冷蔵庫に入れる箇所だけでなく、母子供（まさみち君）を殺害する所にもでている。

母を殺害するときに、母が味わう苦しみを吁希子は、「間接的に」「分ち合いたい」ということを何回も述べている。これは吁希子のマゾヒスト的傾向が究極にまで進んだことを示し、サディストたる眼が、現れ始めたことを表している、河野多恵子は「谷崎文学と肯定の欲望へ最終回」(『文学界』昭和五年二月一日、第三〇巻二号)で、次のように述べる。

マゾヒストはマゾヒストであるだけでは不充分であるところから、もう一人のサディストの眼を生じるようになるだけではなく、サディストの傾向をも併せもつ可能性を孕んでいる。

吁希子は、サディスト的な眼で、母と共に苦しんで死んでいく姿を味わって、見てみたいと考えているのである。

まさみち君の殺害の場面で、吁希子はまさみち君を「往かせたくてたまりません。わたしは、こんなに縁深い、こんなにかわいらしい子を往かせるんですよ。」と言っている。吁希子にとって、殺すことは、自分のものにしてしまうことであり、快楽の世界へ「往かせ」、吁希子はカタルシスを味わうのである。マゾヒズムの心理が現れていることがよくわかる。

### 終わりに

昭和四十三年三月「群像」(第二三巻三号)の、武田泰淳・本田秋五・野間宏「創作合評―二五〇回―」は次の如くに結んでいる。

武田 だからきつと理由があると思う。どうして彼女がこういう小説を書きたくなったか、またそれを完全に書きちゃったということは何か理由があると思う。

野間 武田さんが彼女というのは主人公？

武田 いや、作者。

本多 もし、作家研究をやるとすれば、その脈がたどれるはずだ、将来にわたっても何か糸をひくはずだと思う。

武田 糸をひいてないとこの作品は困る。ぼくは糸をひいているはずだと思っんですよ。

河野多恵子は文壇デビュー作「幼児狩り」(『新潮』昭和三十

六年十二月一日、第五八卷一二号)以来、「劇場」(「新潮」昭和三七七年二月一日、第五九卷二号)「雪」(「新潮」昭和三七七年五月一日、第五九卷五号)、「蟹」(「文学界」昭和三八年六月一日、第一七卷六号)と次々にマゾヒズムを描くことに努めてきた。最近では『みいら採り猟奇譚』(平成二年二月三〇日、新潮社)で、マゾヒストの殺されたい願望を描いている。『不意の声』も、エディプス・コンプレックスからくる吁希子のマゾヒズム(とりわけフロイト流に言う道徳的マゾヒズム)というものが主題であろう。このように、武田泰淳や本多秋五が指摘しているが、初期の作品が「糸をひいて」いて『不意の声』を生み、平成に至るまで「脈がたどれる」のである。河野多恵子は、自らの文学の理念について「創作のミステリー」(「文学界」昭和四四年六月一日、第二三卷六号)で次のように考えている。

小説とは人間の秘密を表現したもの、と言いたい気がする。(中略)人間の秘密の表現なくして、先に述べたような意味でのいい小説は誕生しない。

平凡な家庭生活を営んでいるようにみえる吁希子の心の中に潜むもの、普段は決して見えないもの、そういうものを深く掘り下げて曝し出す。夫である堯一も、前の異性も、母親でさえも気づきもしない吁希子の心の動きが、細やかに描写される。『不意の声』はまさに河野多恵子のいう「人間の秘密」を描き切ったと言えるのではないか。

(注1)：「文芸時評2月―平手打ちを食らう・河野―」(「週

刊読書人」昭和四三年一月二九日、二二二面)

「文芸時評(下)」(「東京新聞」昭和四三年一月二九日夕刊、八八八面)

(注2)：「2月の小説(上)」(「毎日新聞」昭和四三年一月三〇日夕刊、三三三三三三)。

(注3)：「新書解体」(「文学界」昭和四三年九月号、第二二卷九号、一四三―一四七頁)

(注4)：「文芸時評へ上」(「読売新聞」昭和四三年一月二九日夕刊、七七一七面)

(注5)：超自我(『臨床心理用語事典』昭和五六年五月一〇日、至文堂)